

不育症の認知度 低さ浮き彫りに

岡山大調査

流産や死産を繰り返す「不育症」の専門外来を受診した女性の91%が、不育症の知識を「早く知っておきたかった」と答えたとの調査結果を岡山

不育症は、原因によっては投薬で対処できる上、不育症と知らずに流産を繰り返し精神的負担が大きくなるケースもあるため、早期に専門外来などを受診するのが望ましいとされる。

大チームがまとめた。不育症は妊婦の20人に1人が該当するとされるが、認知度の低さが浮き彫りとなった。調査を担当した中塚幹也教授（生殖医学）は「診断や専門外来の受診が遅くなって後悔している人も多い。当事者になる前に学校教育などを通じ知識を持つことが重要だ」と指摘している。

チームは13日に名古屋市で開かれる日本不育症学会学術集会で調査結果を発表する。

2025年5～8月に岡山、広島両県の専門外来を受診した女性85人が回答した。早く知っておきたかったと答えた人に、複数回答で具体的にどこで知識を得たかったかを尋ねると「流産・死産をした病院」が57%だった。また、53%が中学、高校、大学のいずれかの授業や性教育で知りたかったと回答した。

もっと早く不育症を疑えたら良かったと思ったことがある人は60%。もっと早く受診したら良かったと思うことがある人は32%だった。